The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日仏言語における「現在」 : V-POINTをめぐる対照研究
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	言語文化研究. 2010, 36, p. 5-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日仏言語における「現在」

― V-POINTをめぐる対照研究 ―

井　元　秀　剛

Cet article a pour but de clarifier les différences de systèmes temporels entre le français et le japonais. Dans le cadre de la théorie des espaces mentaux, le système temporel verbal est composé par l'articulation des quatre espaces primitifs : BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT. A travers divers exemples concrets, nous développons l'hypothèse qu'en japonais la morphologie temporelle désigne seulement la relation entre l'EVENT et le V-POINT, tandis qu'en français la construction temporelle est réalisée morphologiquement en partant de la BASE jusqu' à l'EVENT, c'est-à-dire en passant également par le V-POINT et le FOCUS. Pourtant, au niveau de l'interprétation, les deux langues disposent l'une comme l'autre de deux axes temporels, EVENT et BASE, d'importance inégale.

キーワード：時制、メンタルスペース、視点

１．はじめに

本稿は日仏語における「現在」の位置づけについて、対照言語学的な考察を行うものである。ここでいう「現在」とは、時制としての現在ではなく、時制を使用する基準となる時点のことである。通常は話し手が発話を発する時点、筆者が依拠するメンタルスペース理論ではBASEと呼ばれているスペースがそれにあたる。だが、

(1)　私が日本に<u>来る</u>時、母が鞄を買ってくれました。

だと、「私が日本に来る」というイベントは過去のものであり、「来る」という現在時制の基準点はBASEではない。(1)における「来る」は「日本に来ようとしている」という状態を表し、この状態は「母が鞄を買ってくれた」という主節のイベントが成立する時点の状態である。つまりこの現在形は主節時を基準として相対テンスと呼ばれるテンスを表現しているのである[1)]。このように「来る」が基準としたスペースはBASEではないので、BASE以外に時間の基準を与えるスペースをV-POINTとして別に設ける必要が生じてくる。

1）以下では現在形という名称ではなく、形態を示すのには「－スル」形という名称を連体形と終止形を区別せずに用いる。「－スル」形はいずれの時制をもあらわさない無標の形と考える考え方もあるが、筆者は無標ではあるが、現在形であるという立場をとる。(1)を、「私が日本に<u>来た</u>時」とすると、主節時からみた「過去」となり、「来る／来た」に「未来／過去」の対立がみられること、「来る前／*来る後」「*来た前／来た後」の制約が存在することなどがその根拠である。「来訪」という名詞だと「来訪前／来訪後」のようにこの制約は存在しない。

本稿が扱う「現在」は広義にはこのV-POINTを指す。この概念を初めて用いたのはCutrer (1994) であるが、そこでは最広義から最狭義までかなり幅をもって定義されている。再広義のものとして次のように記述している。

(2) In its strongest version, V-POINT is the center of conceptualisation and consciousness of the SELF to whom an utterance is attributed. In the strongest version, V-POINT is composed of a bundle of deictic dimensions, although they may or not be evident linguistically. These dimensions may include :

a personal dimension

a temporal dimension

a spatial dimension

a realis/irrealis dimension

a dimension of emotional distance or empathy

a social dimension

a psychological or cognitive dimension. (Cutrer 1994:73)

これは文字通り一般に「視点(view point)」と表現されているものを指し、ことさらV-POINTというような特別な表記も必要なくなる。しかしながら大文字で書いているのは、これが特別なスペースを表すからである。スペースという観点から最もシンプルな定義はCutrerも注に示したFauconnier (1997) による次のものであろう。

(3) Viewpoint, the space from which others are accessed and structured or set up.

(Fauconnier 1997:49)

しかし、これでも実は広すぎる。実際にCutrer (1994) で用いられているV-POINTは、それよりはるかに限定されたスペースを表している。そこで、筆者はCutrer (1994) が実際に用いたV-POINTと、それを日本語にも適応可能な形に拡大したものとして、以下の定義を改めて与えておきたい[2)]。

(4) V-POINT : 定形動詞[3)] が表すイベントが描かれたスペースに、直接テンス素性を与えるスペース

さらにテンス素性として以下の３つを定義する。

(5) 任意の隣接したスペースABについてAからみたBの時間関係として３つの素性を定める[4)]。

a. PAST : BがAより時間的に前にある。

b. PRESENT : BがAより時間的に前にはない。

c. FUTURE : BがAより時間的に後にある。

2) (4) の定義は本稿の考察によって井元 (2010) から採用された定義である。井元 (2003) などでは「FOCUSに直接アクセスするスペース」と定義してきたが、後で述べる理由によってこのように改めた。

3) 時制・人称・数などに呼応する屈折要素を伴う動詞の形態。分詞は非定形とされることも多いが、ここでは分詞の形態も定形動詞に含める。なお、一つの動詞句は一つのイベントしか表さないと考える

4) 後にあげる具体例(13)を見てもらえばわかるが、AはV-POINTとは限らない。

これもCutrerの定義とは異なるが、詳細は後に述べる。(5)の特徴はPRESENTが文字通り「現在」を表すのではなく、「非過去」を表すものとして規定したことにある。これは、多くの言語でデフォルトとして使用されている現在形が、有標の過去の形態素の不在による無標の時制形態として使用されるケースが多いという観察から来ている。実際、英仏日本語のいずれでも、現在を表す形態は非時間的な総称文の言明としても使われるし、未来の出来事を述べるのにも使用される。

(6)　a.　L'avion *part* demain à cinq heures.

　　b.　The plane *leaves* tomorrow at 5 o'clock.

　　c.　飛行機は明日5時に出ます。

(6)は「明日」を意味する副詞が使われていることからもわかるように、未来の出来事であるが、いずれの言語でも現在形が使用されている。このように多くの言語の形態素の価値を最大限に捕捉するためには(5b)のような定義がふさわしいのである。名称もNON-PASTのようなものの方が実態にあっているのだが、多くの言語で使用されている文法用語にあわせている。(5c)のFUTUREは補足的である。PRESENTの領域がFUTUREの領域を完全に覆う以上、この素性のための形態を用意することは言語の経済性からみると好ましくない。そのため英語にも日本語にも対応する形態は存在しない。英語には「will + 原形」という複合形態があって、未来形の名称で呼ばれることもあるが、willはFUTUREではなく、Predictionという推量を表すモダリティのマーカーであると捉える方がよく、3言語の中で唯一フランス語だけがFUTUREに対応する形態を備えていると筆者は考えている[5)]。

さて、(4)(5)の定義をふまえて、(1)を改めて見直してみよう。「私が日本に来る時」の「来る」は「母が鞄を買う」という主節のイベントが成立するスペースから見たら、このスペースが未来であることを指定していると考えられる。従って主節のイベントスペースはPRESENTの素性を従属節のスペースに与えているのだから、(4)に従い、従属節のスペースに対するV-POINTということになる[6)]。ただし、V-POINTはその名称や(2)の定義の姿勢から、視点の所在という認知的観点をもったものであるのは確かだとしても、あくまでも時制を説明するための時間的な視点に限定したものであり、人称や空間は副次的なものでしかないということには留意しておかなくてはいけない[7)]。実際「来る」は視点表現であり、この表現はすでに日本に来ている話者の位置から選択されている。従って(2)のa spatial dimensionの中心という観点を重視すれば、V-POINTはBASEにあると捉えるべきであろう。しかしここでは(4)の定義を採用するので主節のイベントスペースがV-POINTなのである。

本稿が扱うのは、このV-POINTをめぐる日仏語比較である。(1)はそのままの形でフラ

5）井元（2001, 2010）参照。ただし、Cutrerは英語の未来形をFUTUREと分析している。

6）便宜上このような書き方になっているが、主節が従属節にテンス素性を与えているわけではない。後に詳しく述べるように、実際には「私が日本に来るとき」の段階でV-POINTが措定され、このV-POINTの位置をFOCUSとして主節のイベントが導入されるのである

7）認知的観点からの考察は後におこなう。

ンス語に置き換えることはできない。

(7) a. *Quand je *viens* au Japon, ma mère m'a acheté un sac.

b. Quand je s*uis venue* au Japon, ma mère m'a acheté un sac.

「来る(venir)」を(7a)のように現在形においたものは、そもそも非文であるし、(7b)のように過去形においても、それが表しているのは「日本に来た時」であって「日本に来る時」ではない。(1)の内容を表すためには、例えば

(8) Au moment où je m'apprêtais à venir au Japon, ma mère m'a acheté un sac.

というように、アスペクト表現を工夫し、時制は過去におかなくてはならないだろう。これはあくまでもフランス語が、V-POINTをBASEにおいた形でしか従属節を表現できないということから来ているように思われる。このようにV-POINTの取り方が日仏語でどのように異なっているのか、ひいては日仏語における時制の表現の仕方はどのように異なっているのか、ということに光をあてるのが本稿のめざす方向である。

2．4つの基本スペースとテンス

メンタルスペースによる時制論では、これまでにあげたBASEとV-POINT以外にEVENTとFOCUSを基本スペースとして設定している。以下に基本スペースに対する筆者の定義を与えておく。

(9) a. BASE:話し手が言語活動を行っていると想定されるスペース。「イマ、ココ」といったトークン再帰表現が第一義的に参照するスペース。

b. V-POINT：定形動詞が表すイベントが描かれたスペースに、直接テンス素性を与えるスペース。

c. FOCUS：話し手が定形動詞によって表現したい、表現意図の中心がおかれるスペースで、命題の真偽値の計算がなされるスペース。

d. EVENT：定形動詞が表しているイベントが置かれるスペース。

このうちEVENTの定義は理解しやすいが、FOCUSの定義は難しく、(9c)を読んだだけではどのようなスペースなのかイメージしにくいであろう。話し手は定形動詞を使って問題となっているイベントを描くのだから、表現意図の中心、すなわちFOCUSは通常EVENTにある。ところが、英仏語に見られる完了表現では必ずしもそうではない、ということで別に設定されたスペースである。

(10) I *have once visited* Paris.

(10)におけるイベントはパリを訪れたことであるからEVENTはBASEからみてPASTの位置にある。しかしながら(10)の表現意図はパリを訪れたことがあるという現在の経験を描くことにあるので、FOCUSはBASEの位置にあるのである。完了はPERFECTというアスペクト素性として(5)にあげたテンス素性と同じような資格でスペース間解釈に与えられるものである[8)]。筆者によるその定義[9)] は

（11）　PERFECT : FOCUSからEVENTにPASTの素性が与えられる構成にあるイベントのアスペクト

である。

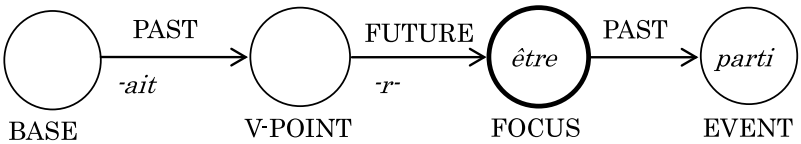
(9)にあげた4つの基本スペースを組み合わせることで、あらゆる時制形態の価値を記述しようとするところにメンタルスペースによる時制論の方向がある。最も複雑な形態は

（12）　Pierre a dit qu'il serait parti avant l'arrivée de Ricardo.

ピエールはリカルドが到着する前には出発しているだろうと言った

のserait partiという条件法過去の形態である。これは図示すると以下のようになる。

（13）



このとき、４つのスペースはすべて異なった時点にある。serait partiは「半過去(-ait)+未来(-r-)+複合過去(être+partiという語彙構造)」という形態素を含んでおり、それぞれが、順に図のPAST，FUTURE，PASTに対応している。ただし最後のPASTは(11)の定義に従いPERFECT である。このときのV-POINTについては補足がいる。(9bd)を素直に読めば、EVENTにテンス素性を与えるスペースがV-POINTと解釈できる。しかし(13)に示した分析では、V-POINT がテンス素性を与えているのはFOCUSであってEVENTではない。そこでこのような分析を可能にするために、次の補助規定を設けなくてはならない。

（14）　アスペクト素性が形態的に与えられたイベントはFOCUSの中で描かれたものと解釈される。

これは、アスペクトとは元来イベント自体の描き方の問題であって、アスペクトを含めた全体を一つのイベントとして解釈すべきである、ということからきている。理論上FOCUS とEVENT を遊離させてアスペクトをスペース構成に還元させているものの、実際は一体のものであって、描かれているイベントはFOCUS におけるものととるべきなのである。英仏語ではアスペクトはすべて形態的に実現するので、(4)と(14)から次の性質が導かれる。

（15）　英仏語ではFOCUSにテンス素性を与えるスペースがV-POINTである。

では、逆に(15)から「英仏語では」という制約を取り除いて、これを(4)に代えてV-POINTの定義とすることはできないのだろうか。

残念ながらそのように定義されたV-POINTは日本語の時制形式の形態分析にはあまり役

8）アスペクト素性として本稿ではPERFECTのみを扱うが、スペース構成に還元できるアスペクト素性としては他にaller + inf.の形で実現するPROSPECTIVEなどを筆者は想定している。cf.井元（2003）。ただし､アスペクトとは本来語彙内容に関係するものであって､｢～しかける｣｢～し始める｣｢～してしまう｣など、あらゆるアスペクト表現がスペース構成に還元できるとは考えていない。

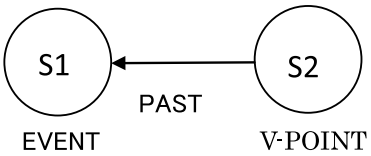
9）これもオリジナルのCutrerの定義とは異なるが、詳細は後に述べる。

に立たない。日本語の場合、あくまでEVENTにテンス素性を与えるスペースをV-POINTととらえると、過去を表す時制形式「－シタ」は実にシンプルに

（16） シタの機能：動詞が表す事行が成立するEVENTをPASTとするV-POINTを設定する。

と記述することができ、「－シタ」のあらゆる用法はすべて

（17）



の図式で表せることを井元（2009）井元（2010）で主張した。矢印の向きが（13）と逆になっているのは、日本語はEVENTが最初に構築され、それがどこから述べられるのかという視点の位置は後から定まる、という考え方に基づいている。この特徴は日本語における発話構成要素の順序が、命題内容の提示の後にアンカリングが続く、という形になっていることとも関係しているだろう。FOCUSの位置は「－シタ」の形態に対しては非関与的である。

（18） a. 夕食はもう食べた。

b. 昨日の夕食は6時に食べた。

同じ「食べた」という「－シタ」形をとっていても、（18a）は「完了」（18b）は「過去」を表すとされ、寺村（1984）では、それぞれを否定形にしたとき、（18a）では「まだ食べていない」、（18b）では「食べなかった」という形が対応することなどをその根拠にしている。この（18ab）の違いは、FOCUSの位置が（17）の図式において、（18a）ではS2にあるのに対し、（18b）ではS1にあることである。しかしながら（18）ではそのどちらもFOCUS の位置とは無関係に（17）の構造を共通に備えているため、同じ「食べた」の形が用いられているのである。ここでV-POINTを英仏語のようにFOCUSに対してテンス標識を付与するスペースと考えるなら、（18a）では、それはBASEであり、与えられるテンス素性はPRESENTということにならざるを得ない。このPRESSENTが「食べた」という形式の中に実現されていると考えるのは無理で、EVENTとの関係と捉えて（17）のように記述する方がはるかに合理的である。「食べた」が表しているPERFECTは、「－シタ」形が形態的に表している価値ではなく、この形態が表している（17）の価値の上に、「もう」などの副詞の働きによってS2にFOCUSが置かれた結果、時制解釈レベルで与えられた解釈にすぎない。時制解釈レベルというのは和田（2001）の用語で、「時制構造にそれ以外の意味的・語用論的情報が加わることで、任意の時制形式が表す最終的な時間値が同定されていく情報処理過程レベル（p. 79）」とされている。時制構造レベルと時制解釈レベルを分けたのは、和田（2001）の卓見であり、筆者も採用したい。「－シタ」形のPERFECTは形態的に実現したものではないから、（14）が適応されず、V-POINTはこの場合もEVENTをPASTとする位置にあるのである[10)]。

一方、英仏語においてはFOCUSとの関係で捉えられたV-POINT→FOCUSのテンス素性はすべて形態的に実現している。(10)や(12)で、PAST部分は複合形の形で実現しているし、FOCUSを指定するテンス素性は、(10)ではhas visitedという形態における助動詞haveの現在形によって、また(12)のFUTUREは条件法に含まれる未来の形態素-r-によって実現している。このように英仏語と日本語に対してV-POINTと分析したスペースは、どちらも定形動詞に対して時制の基準点を提供しているのだから、付与するスペースがFOCUSであれ、EVENTであれ、同一の概念で捕捉するのが望ましい。(2)の定義で出発した意図にも鑑み、３つの言語にまたがった(4)の定義を筆者は提案するのである。もちろん、英仏語の分析では、より客観的に判定しやすい(15)を定義に準ずるものとして便宜的に用いることも問題ないだろう。

次にこの理論の枠内で絶対テンスの概念を次のように定めておきたい。

(19)　絶対テンス :BASEからFOCUSまでのアクセスパス

英仏語ではBASEとV-POINTが重なり、BASE (V-POINT)→FOCUSというアクセスパスとBASE→V-POINT→FOCUSという二つのアクセスパスが存在する。絶対テンスの価値を記述するには、このアクセスパスに与えられたテンス素性をあげればよい。(10)はPRESENTであり、(12)はPAST FUTUREである。日本語の場合、絶対テンスのアクセスパスは動詞の形態として常に実現されるわけではないが、時制解釈レベルのスペース構成から記述は可能である。FOCUSのBASEからみた位置を記述すればよいのだから (18a)はPRESENT, (18b)はPASTである。なお、形態との対応を考えるとあまり意味はないのだが、(1)の「来る」も絶対テンスとしてはPAST PRESENTの価値を持っている[11]。実際(1)に強引に対応させたフランス語の(8)で、「来る」に対応するフランス語はm'apprêtais à venirであるが、このm'apprêtaisはPAST PRESENTの実現形態である半過去におかれている。一般にテンスという用語は時間的意味を実現する形態について呼ばれることが多いが[12]、(19)はこのようにあくまでも形態と独立した意味論的な概念としてある。全く異なった時制体系を持つ言語を比較対照するためにはこのように形態と独立した意味論的概念が必要であると考えるからである。

以上で、メンタルスペースの時制論で用いる基本概念についてはすべて提示したと思うが、最後にオリジナルであるCutrer (1994)の定義との相違点について触れておきたい。

---

10) 日本語でも「彼はすでにパリを訪れている」などにみられる経験を表す「ーテイル」形の場合は、PERFECTが形態的に実現しているので、FOCUSにPRESENTを指定するスペースがV-POINTとなる。

11) (19)の定義によってテンスとはFOCUSまでのアクセスパスだが、PAST PRESENTの素性は主節までまで解釈した段階で与えられる。この時、FOCUSは「鞄を買ってくれた」のイベントが成立するスペースである。「日本に来る」の絶対テンスを計算するにあたっては、時制解釈レベルでFOCUSの「鞄を買ってくれた」スペースと「日本に来る」スペースが同じであるという解釈が成立することを前提としている。

12) 例えば、「中国語にはテンスがない」などの言い方をするときには、形態のことを指している。金水 (2000)では、形態と独立した理論的に要請される意味的範疇を「アスペクト性」「時制性」「様相性」と呼び、具体的な言語においてこれらの意味を表し分ける形態的な対立を「テンス」「アスペクト」「ムード」と呼んで区別しているが、本稿では、「時制性」の意味で「テンス」を用い、形態を問題にするときには「時制」という日本語を用いることにする。

V-POINTについてはすでに論じた。(9)にあげたそれ以外の基本スペースについてもCutrerは認識的な定義を行っているが、筆者はあくまでもスペースとして定義した。ただ、その実態についてはCutrerが想定しているものとそれほどの異同はないと思われる。大きく異なるのは(5)にあげたテンス素性で、Cutrerはこれらの素性をFOCUSにV-POINTから付与する場合しか認めていない。例えばPASTは以下のようになっている。

(20) PAST identifies or cues construction of some space N. It indicates that:

a. N is in FOCUS

b. N's parent is V-POINT

c. N's time is prior to V-POINT (parent)

d. Events or properties represented in N are FACT from V-POINT (parent)

e. N has certain relational properties vis-à-vis other spaces (accessibility)

(Cutrer 1994:180)

これは、英語の過去形を強く意識した規定であるとともに、PERFECTとの差異化をはかる意図が反映していると思われる。だが、これでは(13)の構造で認定されるのはFUTUREだけということになってしまうし、(17)におけるPASTも認められない。(13)(17)で筆者が付与したテンス素性はどれも形態的にも実現しているのだからこれらを認めなければ記述力が大幅に低下してしまう。

またPERFECTの定義も以下のようになっている。

(21) PERFECT identifies or cues construction of an EVENT space N. It indicates that:

a. N is not in FOCUS

b. N's parent is V-POINT

c. N's time is prior to that of V-POINT.

d. space N has certain relational properties vis-à-vis other spaces (accessibility)

(Cutrer 1994:204)

つまり、V-POINTとEVENTの関係ととらえているのだが、これだと(12)のserait partiもPERFECTとは認定できない。(10)や(12)を観察する限り、そこに共通しているのは(11)で定義したような構造だろう。もちろんそこで使用したPASTは筆者が(9)で定義したものであって(20)ではない。PASTとPERFECTの概念についても、PERFECTがPASTを内包しているという観点は重要である。PASTとPERFECTを区別する観点が前面に出ると、フランス語の「助動詞＋過去分詞」や英語の「have+過去分詞」という複合形の価値は多義的になる。複合形は(10)や(12)のようなPERFECTを表す形態であると同時に、以下のようなケースではPASTを表す形態にもなっているからである。

(22) a. Pierre a dit qu'il *était allé* à l'hôpital la veille.

b. Pierre said that he *had gone* to the hospital the previous day.

つまりétait alléやhad goneはPAST PASTのテンスを表していると考えられ、複合形自体は後

半のPASTに対応している。しかしながら、これは複合形の多義性を示しているわけではなく、複合形自体は

(23)　BASE以外のスペースからEVENTにPAST素性が与えられていることを示す形式

という記述ですべてを捕捉することができる。簡単に言えば、相対テンスとしてのPASTということである。(22)はBASE→V-POINT→FOCUS（EVENT）というように、FOCUSと重なる位置にEVENTが置かれているが、ここにPASTを与えているのはV-POINTであってBASEではない。またPERFECTは定義によりFOCUSがEVENTにPASTを与えるのであり、この前段階としてBASE からFOCUS までのアクセスパスがテンスとして存在する[13)]。分詞形として用いられたものはそもそもBASEとは無縁の形態であるので、これらはすべて(23)を満たしている。(23)があてはまらず、過去形が使用されるのはBASEがV-POINTと重なり、そこからFOCUSと重なるEVENTにPAST素性が与えられるケースに限られる。フランス語の複合過去形は実際そのような構成になっているが、筆者はその場合もBASE→V-POINTにPRESENTのテンス素性付与をする段階があって、EVENTはBASEから離れたV-POINTからPASTを付与されているという解釈を反映していると考えている。フランス語において、複合過去、半過去、単純過去の３つの過去形が併存しているのは、それぞれが

(24)　a.　複合過去：PRESENT PAST[14)]

b.　半過去：PAST PRESENT

c.　単純過去：PAST

という異なった価値を本来的に体現する体系になっているからであると考えるのである。ただし、PRESENT PASTの最初のPRESENTはスペースのずれを伴うものではないから、単純過去と同様な価値と再解釈され、(23)では収まりきれない方向に拡張しつつあるということは認めなくてはいけないかもしれない。また日本語のテンス形態はもともとBASEやFOCUSの位置とは無関係なので、(23)のための特別の形態を必要とせず、終止形と連体形が同一であり、「ーシタ」形で、「折れた枝(branche cassée)」のような形容詞的なものまで表現できる。

３．時間座標の複数性

メンタルスペース理論がBASEとV-POINTという二つの基準スペースを用意しているのは、言語における時間座標の複数性というとらえ方を反映している。日英仏語における時間副詞の体系をみても、基準点を異にする二つの副詞体系が存在する。すなわち、BASEを基準とする「主体中心(nynégocentrique)[15)]」と呼ばれる

13）現在完了形の場合、BASE，V-POINT，FOCUSの3つが重なり、ここからPASTの位置にEVENTが構築されることはあるが、この場合もEVENTにPAST素性を与えているのはFOCUSだと考えられる。
14）FOCUS位置の違いによりPRESENT PERFECTとなるケースも含む。
15）Damourette & Pichonに端を発する用語でKlum（1961）が採用している。

(25) a. 今、今日、昨日、明日、今朝、今晩、昨夜、先週、来週

b. maintenant, aujourd'hui, hier, demain, ce matin, ce soir, hier soir, la semaine dernière, la semaine prochaine

c. now, today, yesterday, tomorrow, this morning, tonight, last night, last week, next week

というグループとV-POINTを基準とする「客体中心(allocentrique)[16]」と呼ばれる

(26) a. その時、その日、前日、翌日、その朝、その夜、前夜、前週[17]、翌週

b. alors, ce jour(-là), la veille, le lendemain, ce matin-là, ce soir-là, la veille (au soir), la semaine précédente, la semaine suivante

c. then, that day, the previous day, the next day, that morning, that night, the previous night, the previous week, the next week

の二つのグループが存在する。ただ、より正確には、(25)の主体中心副詞は単一座標、(26)の客体中心副詞は複数座標を取っているというべきであろう。le lendemainというような言い方は、V-POINTと離れたBASEの視点からまずV-POINTに基準をおいて、さらにその次の日ということであって、V-POINT単独で指定しているわけではない。

それでは以下にこの複数の座標が、フランス語と日本語の時制形態にどのように反映しているか、ということを見ていく。

3.1.フランス語の場合

フランス語の場合、BASEからEVENTまでのアクセスパスが、時制形態としてすべて実現することにその特徴があるが、テンス、すなわちFOCUSまでのアクセスパスは、単一基準をとって、BASEからFOCUSまで単一のテンス素性で示されるものと、BASEからV-POINTを介してFOCUSに至り二つのテンス素性が与えられるものとの二つしかない。図示すると

(27) a. BASE (V-POINT)→FOCUS

b. BASE→V-POINT→FOCUS

の二つである。(27a)はBASEとV-POINTが重なるスペースからFOCUSが指定されるという単一構造を表しているが、V-POINTの概念は時間の基準を与えるBASE機能の拡張として設定されたものであるので、BASEが本来の機能を行使し、BASEがV-POINTになっていると捉えた方がよいかもしれない。(27b)は(27a)の構造の上にのっている。すなわち、(27a)と(27b)の間に中間的な段階

(28) BASE→(V-POINT) FOCUS

を想定し、(27a)の段階からV-POINTがFOCUSの位置に移動した段階として(28)をとらえ、

16) 同じくDamourette & Pichonに端を発する用語でKlum (1961)が採用している。

17) 日常用語ではあまり用いられないが、報道文などで、「厚生労働省は15日、インフルエンザの集団感染によって休校や学年・学級閉鎖をした学校（保育所、幼稚園、小・中・高校）が、6～12日の1週間で2158校あったと発表した。多くの学校で夏休みが明けた前週（8月30日～9月5日）の772校から2.8倍に増え、欠席者数も前週の3.3倍の1万9948人に上った。」(毎日新聞)などのように使う。

さらに(28)の段階からFOCUSが新しく作られたスペースに移動したものが(27b)となるのである。この基本スペースの移動は勝手にできるわけではなく、Cutrerは可能な移動を談話構成原理として定式化している。

(29)　談話構成原理　(Cutrer 1994:77)

a.　あらゆる解釈のプロセスにおいて、FOCUSは一つしか存在しない。

b.　単一の階層構造において、BASEは一つしか存在しない。

c.　BASEは最初のV-POINTである。

d.　FOCUSがBASEにあれば、V-POINTもBASEにある。

e.　新しいスペースはBASEもしくはFOCUSから作られる。

f.　FOCUSはEVENT, BASE, 以前のFOCUS, 新スペースにシフトすることができる。

g.　V-POINTはFOCUSもしくはBASEにシフトすることができる。

h.　EVENTはFOCUSになりうる。もしくはFOCUSあるいはV-POINTの娘である新スペースにシフトすることができる。

これによって(27a)から(28)に至る過程でみられたV-POINTのBASE位置からFOCUS位置への移動は(29g) によって保証され、(28)から(27b)の移動は(29f)によって保証されているということになる。これらの移動は、必ずしも直感から離れたものではない。(22)における談話の流れをたどってみよう。まず(29ce)に従ってBASEと重なるV-POINTの位置からPASTの素性が与えられる位置[18] に新しいスペースが作られ、その中で「彼が言う」というイベントが描かれ、(29fh)に従って、FOCUSとEVENTがそのスペースに移る。次に(29g)による中間段階の(28)へのシフトが想定されるわけだが、これは語り手の位置にあった視点が、ここで発言をしたPierreの位置に移るということであるから、極めて自然な移動である。そして最後はその視点の位置からさらにPASTの位置にまた新たなスペースが作られ、「病院に行く」というイベントがそのスペースの中で描かれ、FOCUSとEVENTがこのスペースに移り、(27b)の段階が完成するのである。英仏語の特徴はこの段階でBASEからFOCUS (EVENT)に至るまでのアクセスパスがすべて形態的に実現することであり、PAST PASTという複合的なテンスがétait alléという形になって実現されているのである。ここで大切なことは

(30)　(27b)の構造を得るには中間的な(28)の段階が形態的に保証されていなくてはならない。

ということである[19]。英仏語においてFOCUSとV-POINTが重なる(28)の構造をもつアスペクトをIMPERFECTIVEとよぶ[20]。フランス語でIMPERFECTIVEな時制は半過去形と現在形だけである。半過去形はPAST IMPERFECTIVEの形態であり、PAST PERFECTIVEであ

18) 形態上はPRESENT PASTの位置

19) (30)は(29)から導かれる。(29c)により、V-POINTは最初はBASEにあるので、(29)に則った形で移動していかなくてはならない

20) 日本語ではEVENTとV-POINTが重なるアスペクトである。

る単純過去と対立する。PERFECTIVEとはV-POINTとFOCUSが重ならないアスペクトのことである。英語の場合過去形にPERFECTIVEとIMPERFECTIVEの対立はなく、「過去形」がPAST PERFECTIVEな過去もPAST IMPERFECTIVEな過去も表し得る。フランス語でも現在形はどちらの価値も備えていると考えられるが、この問題はここでは扱わない。フランス語の半過去がPAST IMPERFECTIVEであって、(28)の構造でPASTを指定するということは、(27a)の段階からV-POINTが過去のスペースに移動したような形に等しい。このことは半過去の本質としてしばしば「視点の移動」というように説明されてきたことと符合する。実際単純過去で書かれた文の中に半過去が使われた場合、談話レベルでV-POINTがBASEからFOCUSの位置に移る。しかし、このことは、視点が常にぶれているということを意味するわけではなく、一貫してBASEは同じ位置にあって全体を統括していることに変わりはない。春木（1999)は半過去の特徴を「発話者の視点が過去空間に移動する」、というように表現しながら、「しかし、発話者は現実に発話空間に居るわけだから、発話者はいわば発話空間に自分の影を残しつつ観察者としての自分を過去空間に移動させて語っていることになる。つまり、半過去使用時に構成されている過去空間は発話空間とは別の認識空間としてはっきり区別されつつも、同時に発話空間と密接に繋がっているのである。半過去の機能を考える場合、この過去空間が発話空間と密接に繋がっているという点が何よりも重要である。(p.16)」と述べている。春木の「発話空間」はBASEに、「過去空間」はV-POINTと重なる概念であるから、筆者は全面的に賛成である。半過去の場合複合的な視点が存在していて、V-POINTがFOCUS位置に前面に出ているのに対し、単純過去では一時的に抑制されて背後にひいているというような表現でもよいかもしれない。(15)に記したように、フランス語ではV-POINTはFOCUSとの時間関係を規定するスペースであるので、半過去の場合FOCUSに対してPRESENTという素性を与えることになる。従って図式的に言えば、PAST IMPERFECTIVEの価値はPAST PRESENTに等しい。単純過去はただのPASTなので、単純過去と半過去の違いは2番目のPRESENTという見方の有無にすぎず、どちらもFOCUSがBASEからPASTの位置でアクセスされていることに変わりはなく、単純過去と半過去が混在していても視点上のぶれは存在しないのである。また、半過去が現在との対比を表す場合、感覚的には視点は常に現在にあっていわゆる「視点の移動」などは感じられないように思える。

(31) Aujourd'hui, le 10 octobre n'est plus un jour férié alors qu'il l'*était* jusqu'à l'année 1999.
今日では10月10日はもう祝日ではない。1999年まではそうだったんだけど。

ただし、この場合半過去が持つPAST PRESENTの価値のうち最初のBASEからV-POINTにいたるPASTの部分で現在の記述との間に対立が生じているので、あとのPRESENTの価値が見えにくくなっているというにすぎず、V-POINTが過去スペースにあること自体は変わらないと考える。ただし、PAST PRESENTはPASTの後にPRESENTを与えるというような二段階の操作ではなく、この複合的な内容が全体として理解されるものであるということ

は付け加えておかなくてはならない。これはPAST PASTと理解される大過去の場合も同じで、理解される価値はその全体である。(22)などでは、直前のFOCUSとV-POINTがBASEではなくa ditの位置にあるので二段階の操作のように見えるが、était alléの段階で、その全体的構造を同時に把握していると理解したい。半過去の場合も二段階あるのではなく複合的な視点をとった全体がひとまとまりに理解されるのである。

最終的にテンスとして解釈されるテンス素性は(27)で与えられる二つに限られるが、アスペクトと解釈されるFOCUSがEVENTに与える素性もある。PASTを与える場合がPERFECTであるが、これはアスペクトであるので、テンスの構造を示した(27)の中には当然入ってこない。(10)はPRESENT PERFECTであって、(27a)の構造でPRESENTが指定されるだけであり、テンスはあくまで「現在」なのである。同様に、三層のテンス構造を持つように見える(12)も最後はPERFECTであるから(27b)で示した二層にすぎない。フランス語には次のような次のような複複合過去という形式も存在する。

(32)　Dès que vous m'*avez eu quitté*, (…) vous avez aussitôt cherché une revanche.
僕と別れたとたん、君はすぐ報復手段を捜した。
(Beauvoir, in 朝倉 (2002))

この場合にもPRESENT PAST PASTという3つのテンス素性が、それぞれavez (現在形)、avez eu (avoirの複合形)、eu quitté (quitterの複合形)の形態に対応するが、ここでも最後のPASTはPERFECTであってテンス構造は(27b)の二層である。

(30)によって(27b)の二層からなるテンスはIMPERFECTIVEな時制形態による(27a)の構造の上に成立するということから、以下のような性質を導くことができる。

(33)　半過去形もしくは現在形以外の助動詞と過去分詞の結合はPERFECTのアスペクトとしてしか解釈されない。

(33)は別の言い方で言えば、複合形がテンスのPASTと解釈されるのはPAST PASTと解釈される大過去の場合と、PRESENT PASTと解釈される複合過去の場合に限られるということである。これは大過去と前過去の違いの大枠を説明する。すなわちPAST IMPERFECTIVEを表す半過去におかれたavoirもしくはêtreと過去分詞の結合からなる大過去はPAST PASTの解釈とPAST PERFECTの二つがあるのに対し、PAST PERFECTIVEである単純過去におかれたavoirもしくはêtreと過去分詞の結合からなる前過去はPAST PERFECTの解釈しか存在しない。大久保 (1997)はMartinの説をひきながらこの事実をPQP[=大過去]は先行と完了を表し、PA[=前過去]は完了しか表さないとまとめ、なぜこのような違いがあるのかという疑問を提示し、それがReichenbach (1966)の時制論では説明できないとしている。メンタルスペース理論では、大過去のPAST PERFECTと前過去のPAST PERFECTの間にどのような違いがあるかということまでは説明できないが、すくなくともこの大久保の疑問には(33)のような理論的帰結として答えることが可能である[21)]。ここでは前過去と大過去の違いについてこれ以上踏み込んだ議論は行わないが、複合過去

21) ただしCutrer自身はこのような論法をとっていない。

で書かれた文の中にも、完了性が強調される場合には前過去が使われることもある、という実例をあげておく。

(34) Une fois qu'on eut *constaté* l'étendue des dommages, on a organisé les mesures d'urgence et, comme je le disais, les dons ont commencé à pleuvoir.

(Once the extent of the damage was realized, action was taken and the donations started pouring in.) (Hansard Corpus)

複合過去が基調にあるこの文では、本来PRESENT PAST PERFECTである(32)のような複複合過去を用いてUne fois qu'on a eu *constaté* ...と表現すべきものであるが、最初のPRSENTの部分は形態的に実現する必要は必ずしもないので、PAST PERFECTである前過去が文体的に好まれたために用いられたものだと考えられる。

(33)はまた、未来形はIMPERFECTIVEな時制ではないから、前未来や条件法過去もFUTURE PERFECT を表すことはあっても、FUTURE PASTを表すことがない、ということも示している[22)]。もちろん、FUTURE FUTUREを表す形式もない。これはPaul a dit que…と過去形で伝達した場合、V-POINTはPaulが話をする時点に移って、そこから話の中身を伝える形式になるが、Paul dira que…と未来形で伝達した場合、この未来の発言の時点にV-POINTが移動することは原則としてないということでもある。実際に使われたdira queの用例を見ても、ほとんどは単なる推量で、発言の中身はBASEからアクセスしたと思われるものばかりである。

(35) Le ministre des Finances nous dira qu'il a *réduit* les impôts.

(The Minister of Finance will say we have decreased taxes.) (Hansard Corpus)

(35)におけるa réduitの公式の英語の対応はhave decreasedなので、この従属節のテンスアスペクトはPRESENT PERFECTと解釈すべきなのかもしれないが、その場合でも、またPASTと解釈した場合でも、「税金を下げた」というイベントに対する時間的なアクセスは大蔵大臣の視点ではなく、発言者の視点から行ったものであり、V-POINTはBASEにあると解釈するのが自然である。ただ、どうしても発言時点にV-POINTを移動しなくては表現できない極端なケースも作例すること自体は可能である。

(36) Le secrétaire dira à minuit qu'il *a brûlé* les documents quelques heures auparavant.

秘書は深夜に書類は数時間前に焼きましたと言うだろう。

(36)を現在はまだ焼いていないという段階で発したものと解釈することもできるだろう。しかしその場合でも、BASEからFUTURE PASTでイベントにアクセスする形態をフランス語はもっていないので、(36)のようにPRESENT PASTでアクセスせざるを得ない。(5b)の規定からわかるようにPRESENTで未来の時点にアクセスすることも可能だからである。しかし、この場合BASEからEVENTまでの時間関係はほとんど意識されることはない。

22) Yamada lui téléphonera mais elle *sera partie* deux heures plus tôt.「山田は電話するだろうが，彼女はそれより２時間前に発っていることだろう」曽我（1995:127）など、「先立性」を表すとされる用法も、日本語の「発っている」同様、FOCUSは「山田が電話をする」時点にあると考える。

このようにフランス語は(27)に示した二つのテンス構造を基調に、アスペクトがその間隙をうめるような形で動詞の時制形態が構築されている。「現在」意識にかかわる視点は、BASEと、IMPERFECTIVEな時制形態にささえられたBASEから遊離したV-POINTの二つの座標が複合的に存在している。

3.2.日本語の場合

日本語の時制形態の特徴は、基本的にEVENTとV-POINTの関係を示すものであるということであり、V-POINTとBASEが重なった場合しか、絶対テンスを表すことはない。

(37)　彼は昨日神戸に行った。

の「ーシタ」形は絶対テンスとしての過去を表しているように見える。しかし、この場合、BASEとV-POINTの位置が重なり、さらにEVENTとFOCUSが重なったために、V-POINTからEVENTに対するPASTの指定が、BASEからFOCUSに対する指定のように見えているだけで、絶対テンスとしてのPASTは時制解釈レベルでの認定にすぎない。

(38)　神戸に行った後、大阪によって帰ります。

とすると、同じ「行った」が未来の事象を表していて、このEVENTのBASEからの位置は、主節の終わりまでいった段階で、未来としてのPRESENTにPASTが加わったものであることが理解できる、しかし、PRESENT PASTのアクセスパスは形態的には実現していない。

フランス語で(27b)の二層構造で示され、PAST FUTURE PERFECTの形態を持つ(12)のserait partiに対応する日本語の「出発しているだろう」も、後半のFUTURE PERFECTの部分は、FUTUREがモーダルの「だろう」として、PERFECTが「出発している」のテイル形として実現しているものの、最初のPASTに対応する形態はなく、(27a)でBASEを欠いたような一層の構造にとどまっている。この時形態として実現しているテンス素性は、「出発している」の「ースル」形で表されたPRESENTと、「ーテイル」形で表されたアスペクト素性PERFECTに内包されるPASTだけである。本稿では「ーテイル」形に関する詳しい分析は行わないが、このアスペクトマーカーに関して、筆者はおおむね次のように考えている。「ーテイル」は「歌っている」のように進行を表す場合もあり、動詞のイベントを状態化するマーカーであり、英仏語の複合形のようにPASTを指定するのが本来の機能ではない。ただし、本来的な機能から派生した働きとして、PERFECTを表すことがある。しかしながらそれはあくまでもPERFECTであって、そのEVENTにFOCUSがおかれることはない。つまり「テイタ」形がフランス語の大過去のようにPAST PASTを表すことはない。

(39)　a.　ピエールは前日病院に行っていたと言った。

　　b.　ピエールは前日病院に行ったと言った。

(39a)は前日何をしていたのかと聞かれて、その時成立していた状態として「病院に行っていた」と答えるものであって、FOCUSは「言った」の時点にあり、表しているのはあくまでもPAST PERFECTである。(22)に対応する日本語の表現は(39b)の方であり、形態が示すのはV-POINTからのPASTという関係のみだが、主節の位置から時制解釈レベルで

PAST PASTの価値を持っていることがわかるのである。

このように日本語の時制形態はBASEと直接関係を持たないV-POINTの位置からイベントの時間関係を指定する一層の構造しか備えていない。このことを和田は

(40) 英語の定型述語の時制構造は絶対時制部門と相対時制部門からなる複合構造をもつのに対し、英語の非定型述語と日本語の述語は相対時制部門のみからなる単一構造をもつ。 (和田 2001:79)

と表現している。和田の用語では分詞は非定型述語に含まれ、相対時制部門というのは本稿の用語でいえば、(23)のようにBASE以外の位置からテンス素性を付与する部門のことを言う。(27b)の構造のうち、後半のV-POINT→FOCUSの部分、さらにアスペクトにかかわるFOCUS→EVENTの部分が相対時制部門によって与えられることになる。和田と筆者では依拠している理論体系は異なるものの、(40)の主張は、英語をフランス語に置き換えたときに筆者の主張と完全に重なるものであると思われる。

しかしながら、一層の構造、すなわち和田の用語では相対時制部門しかもたない日本語でも、時制解釈レベルにおいて、個々の述語の絶対テンスとしての価値を計算することは常に可能である。これまでに述べてきたように、(1)の「来る」も形態的に実現しているのはPRESENTのみだが、主節の述定が終了した段階で、PAST PRESENTの価値をもつことがわかるし、(12)「出発しているだろう」がPAST FUTURE PERFECTの価値を持ち、(39b)の「行った」がPAST PASTの価値をもっていると解釈することも可能である。時制解釈レベルを想定することで、単一の基準点しかもたない日本語が、副詞として英仏語同様、(25)と(26)の二つの体系を備えていることも説明可能になり、異なった時制構造を備えた言語で、最終的に同じような内容を表現できるということも理解できる。

日本語のもう一つの特徴は、最後までいかないとそれが何時のことだかわからないということであり、井元(2006, 2007, 2008, 2010)でこれまで繰り返し主張してきたように、EVENTのあとにV-POINTが設定されるということだろう。日本語の場合、

(41) 太郎は9時に起きて、ゆっくり顔を洗い、食事をとって、おもむろに家を出て、大学に向かった。

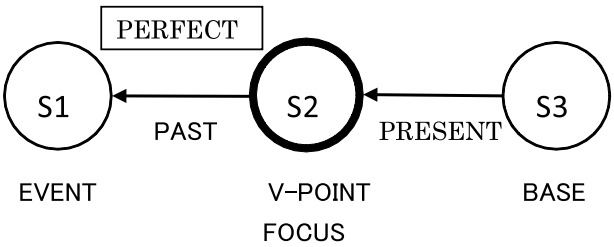
のように一連の出来事を連用中止法で、時制を与えることなく述べることができる。この間イベントを構成する意味的要素はすべて提示されており、聞き手読み手の認識の中ではこれらの出来事が、イメージとして展開されていっているはずである。つまりEVENTは時制要素ぬきに成立し、「向かった」の段階まできて、V-POINTが、それまでの一連の動きをPASTとみるような位置に逆向きに設定されるのである。図示すると(17)のようになる。これが

(42) 駅に着いたら電話をしてください。

のような複文構造になると、主節までいった段階で、解釈レベルで二層構造をたどること

ができる。従属節の「着いた」に注目して図示すると以下のようになる。

(43)



これは「駅に着いた」と「電話をしてください」の二つの述定を一つにまとめたものである。まず、「駅に着く」のイベントがS1で成立し、「ーシタ」形によってこのイベントをPASTとするようなV-POINTであるS2が設定され、ここにFOCUSがおかれる。次に、「電話をしてください」の段階で、FOCUS位置は変わらないものの、EVENTがS2に移り、ここに「電話をする」のイベントがおかれる。この時「してください」の「ースル」形が、S2をPRESENT(未来)とする位置S3にV-POINTを移動させるが[23]、ここが最後のV-POINTであるのでBASEと重なるのである。このようにフランス語との対比のために二つのイベントを重ねて表示してあるが、実際は主節の段階で、EVENTはS2に移り、V-POINTもS3に移っている。注目したいのはこのときのV-POINTの流れである。V-POINTはあくまでも、(4)で定義されるスペース構成に基づく概念だが、これはどこからイベントを見つめているか、という文字通りの認知的な「視点」ともかなりの部分で重なると筆者は考えている。日本語の基本構造は(17)で、V-POINTは後から与えられるといっても、(41)のようにV-POINTが指定される前のEVENTの段階で、その行為を見つめる潜在的な視点まで存在しないと仮定することは難しい。そこで潜在的なV-POINTがEVENTの中にあって、それが述定の段階で明示的なV-POINTの位置に移動すると考えたい。この潜在的な視点は、(42)の構造において、主節の「電話をしてください」に先立ってS2にあるV-POINTに対応する。「電話をする」という行為は文字通りこのS2を視点として描かれ、最後にS3からこの時間が指定された関係になっているのである。そうすると、V-POINTは最初はEVENTにあって、それが最初の述定でS2に移り、次の述定でS3に移ったと考えることができる。つまり、(29)の談話構成原理は日本語の場合、(29c)は「BASEは最後のV-POINTであり、最初の(潜在的)V-POINTはEVENTにある」と改めなくてはならないし、(29g)に加えて、「FOCUSはV-POINTの位置にシフトできる」というような項目も付け加えなくてはならないだろう[24]。BASEが最後のV-POINTである、という性質から、日本語の場合、主文の述語を指定するV-POINTはBASEになることが多く、大体は絶対テンスを表しているように見える。ただ、談話レベルでBASEに戻ればよいので、過去形を基調とする小説で以下のような例に出会うことはまれではない。

23) 日本語の場合、動作動詞が表すPRESENTは、未完了、すなわち未来の解釈をうける。
24) このような構造を想定することで説明が可能になる具体的な言語現象については、井元(2007,2008)などを参照。

(44) ふと目をやると、扉が開いている。おかしいと思って中へ入った。

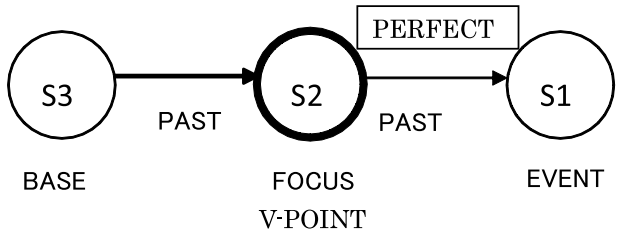
この最初の「扉が開いている」は目をやった主人公の視点の位置をV-POINTにとっており、次の文の最後でV-POINTがBASEにいたって談話が安定するのである。しかしこの場合も「扉が開いている」は解釈レベルで、主人公が観察した過去の状態の記述であることは容易に理解できることに変わりはない。

フランス語で(42)に相当するのは

(45) Quand tu *seras arrivé* à la gare, tu me téléphoneras.

である。この時、従属節のseras arrivéという単独の述定で形態的に(43)に相当する構造が成立している。図示すると

(46)



となる。スペースもBASEであるS3から始まっており、(43)とちょうど逆の順番になっていることがわかるだろう。英仏語のようなV2言語では、目的語等の要素は動詞のあとにおかれ、定形動詞の出現前にイベントの内容が提示されることはない。つまり、V-POINTがEVENTに先行する形で存在せざるを得ないのである。最初のV-POINTはBASEの位置にあり、この位置からすべてを統括しているということができるだろう。

4．結語

このようにみてくると、フランス語はBASEを中心とし、時にイベントに入り込むような視点を補助的に用いて談話が展開し、その時間指定の道筋がすべて形態的に実現しているのに対し、日本語はEVENTの側に視点の中心があって、形態的にもこの視点からの時間指定がなされるだけであるが、時制解釈レベルで談話全体の時間関係が統括されていることがわかる。しかしながら時制解釈レベルにたって二つの言語をみてみると、定形動詞の形態によって実現するか否かにかかわらず、視点は常にEVENTとBASEの双方にあって、そのどちらかに重点をおきながら談話を理解しているように思えてくる。つまり、我々は語り手の現在、すなわちBASEがどこにあるのかを常に知りつつ、一方でEVENTに身をおき、そこで語られている内容をあたかも現在展開中のこととして目撃するような感覚を常に持っている。問題はこの視点のバランスで、日本語の場合、動詞形態はイベント中心に設定されていても、「昨日」や「明日」などといった時間副詞は文頭の早い位置に現れるのが普通で、あらかじめBASEからの位置を指定し、時制解釈レベルでの統括を容易にするような構造になっている。これに対し、BASEからの位置がすべて動詞形態で実現して

いるフランス語では、副詞の位置は比較的自由であるが、内容も動詞と同じようにBASEからみたFOCUSの位置を指定するのが普通である。面白いのは(25)にあげた主体中心の副詞は、BASEを基準にとるダイクシスだが、その基準点は容易にV-POINTに移ることである。実際、単純過去で表現されているイベントのV-POINTは過去ではなくBASEにあるので、Klum（1961）の調査では、単純過去と主体中心副詞との共起は全く観察されていない[25]。これらの副詞が過去を基準点にとるのは半過去で書かれた場合に限られるのである。ただ、最近になってVuillaume（1983,2008）やNoël（1996）などが、少ないながらもこれらの副詞と単純過去との共起を報告している。Noël によると、単純過去と共に用いられたmaintenantは作中人物の心理に焦点があたって、その変化の始発相をとりあげるものであることが多い。

（47）　Et maintenant, un grandissant malaise s’empara de l’esprit d’Albert [⋯]

（Gracq, in Noël : 1996）

そして今、次第に大きくなっていく不快さがアルベールの心をとらえた

こうしてみると、フランス語でも、動詞の形態的な制約とは別に、解釈レベルではEVENTの側にも潜在的な視点をおいているように思える。副詞と動詞の時制との関係などに関する詳しい考察は、また稿を改めて論じてみたい。

参考文献

朝倉季雄（2002）『新フランス文法事典』白水社.

Cutrer, M.（1994）, *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.

春木仁孝（1999）「半過去の統一的理解をめざして」『フランス語学研究』33, 15-26.

井元秀剛（2001）「未来形はテンスなのか?」『Gallia（大阪大学フランス語フランス文学会）』, 3-10.

井元秀剛（2003）「メンタルスペース理論からみたフランス語の近接未来」『言語文化共同研究プロジェクト2002 言語における時空をめぐって』大阪大学, 1-8.

井元秀剛（2006）「英仏日本語における時制の基準点」『言語文化共同研究プロジェクト2005　言語における時空をめぐってIV』, 1-10.

井元秀剛（2007）「日本語の視点、英仏語の視点」『水声通信』19, 88-97.

井元秀剛（2008）「過去形に対応する現在形」『テキストの生理学』朝日出版社, 167-180.

井元秀剛（2009）「「た」の過去性と過去の意味」『言語文化共同研究プロジェクト2008 言語における時空をめぐってVII』, 11-20.

井元秀剛（2010）『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.

25）Klum（1961）のコーパスは小説や戯曲、回想録などから構成されるものを二つのグループに分けて調査したものであり、扱った頁数の合計は12,692頁にもおよんでいる。

金水敏（2000）「時の表現」『金水敏、工藤真由美、沼田善子『時・否定ととりたて』岩波書店, 3-92.

Klum, A.（1961）, *Verbe et adverbe : étude sur le système verbal indicatif et sur le système de certains adverbes de temps à la lumière des relations verbo-adverbiales dans la prose du français contemporain*, Almqvist & Wiksell.

Noël, M.（1996）, "Un fait de style : *maintenant* dans *Au château d'Argol* de Julein Gracq", *études de linguistique appliquée* 102, 157-174.

大久保伸子（1997）「前過去と大過去」『フランス語フランス文学研究』71, 82-95.

Reichenbach, H.（1966）, *Elements of symbolic logic*（c1947）, Macmillan.

曽我祐典（1995）『フランス語がわかる』白水社.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版.

Vuillaume, M.（1983）, "Grammaire temporelle des récits de fiction", *Semantikos* 7-1, 62-76.

Vuillaume, M.（2008）, "MAINTENANT en contexte narratif non-fictionnel", *Cahiers chronos 20 Ici et maintenant*, Rodopi, 35-51.

和田尚明（2001）「英語の完了形・日本語の完了形相当表現の時間構造と定時点副詞類との共起性」『言語研究』119, 77-110.